整っていること、制作者が非常に誠実に忍耐強く研究していることなどに大変感動したことを述べている。

雨山は帰国後直ちに教授となった（三月十五日）。当時研究科に在籍していた高村光太郎はロダンに関する思い出の中で次のように述べている。

私がロダンの名をはじめて聞いたのは明治三十六年頃だつたと思ふ。其頃はロヂンと發音してゐる人もゐた。丁度東京美術學校彫刻科を卒業して研究科にゐた頃のことであつた。フランスから彫刻科の助教授白井雨山先生が歸朝せられて、其の新知識をいろいろ生徒に披瀝せられた中にロダンの名があつた。私は既に彫刻科を卒業したものの、彫刻についてはまだまるで暗中摸索の狀態で、どんな新知識の一片にでも飢ゑ渇いてゐた時であつたから、何でも根掘り葉掘り先生にいろんな事をたづねた。フランス彫刻の寫眞も多數持つて歸られたが、その中にロダンのものはなかつた。バルトロメとか、カルポオとか、ダルウあたりのものを見せられたやうにおぼえてゐる。先生は教室で私の油土の彫塑を見て、「君の作風は細かにきれいに仕上げる方だからロダンの行き方とは違ふ。ロダンは狂人のやうな彫刻家で、奇矯な作をつくる。あんなまねは爲ない方がいい」といはれた。作風が違ふといはれると、その違つた作風が知りたくて却て甚だしく好奇心をそそられた。

（『高村光太郎全集』第七巻。昭和三十二年筑摩書房）

③ 白浜徴の留学

明治三十六年七月三十日、白浜徴は満三年の欧米留学を命ぜられ、翌三十七年三月十八日に出発した。正木直彦の期待を担って新しい図画教育のリーダーに相応しい知見を得るためであり、図画教育界ではこれが最初の国費留学生であった。同年五月、白浜はマサチュセッツ州立図画師範学校(Higher Nomal Art School)に入学。セントルイス万国博に出かけたり、ボストンでは岡倉天心や六角紫水らとも交流があったようである（282頁書簡参照）。

マサチュセッツ州立図画師範学校はイギリスから招かれた Walter Smith のプランによって一八七三年に出来た学校で、白浜がここで具体的にどのような勉強をしたかは不明であるが、帰国後の著述等から判断して白浜は同校やボストン、ニューヨークの図画教育の思潮に多くを学んだ様子である。当時はフェノロサが米国各地で日本美術、美術教育に関する講演を続けており、フェノロサの説に共鳴してフェノロサ＝ダウ方式と呼ばれる日本画を採入れた革新的な図画教育法を樹立してコロンビア大学で活躍していたダウ Arthur Wesley Dow (1857～1922) が居て、ボストンやニューヨークの図画教育界で支持されていた。白浜もコロンビア大学でダウの幻灯を使用した講義を聴き感銘を受けたらしい。ダウと白浜の関係については金子一夫著「続・日本の近代美術教育史」〈9〉〈12〉（『美育文化』第二十八巻第七号。昭和五十三年七月、同第十二号。同年十二月。美育文化協会）および「アーサー・ウェズレイ・ダウの鑑賞教育」（『美術教育論ノート』同五十七年六月。開隆堂出版）に論攻があるが、金子氏は後者に於いて、「白浜は帰国後、国定教科書『新定画帖』の編集に参加し、多くの新教材をもたらす。シルエット画、『位置の取り方』

（構図法）、連続模様などがそうである。そのいくつかはダウの方法、あるいはダウに刺激されて考案、実践されていた方法を参考にしたのではないかと思われる。『新定画帖』の新教材はダウの方法と言うより、その一部を表面的に利用したにすぎないけれども、最も早い紹介であろう。」と述べている。

白浜は三十八年六月に同校を修了し、同年八月ボストンを発ち、九月ロンドンに着いた。しかし、イギリスには余り学ぶべきものが無いとしてパリに移り、三十九年四月よりドイツに転学。四十年三月二十一日に帰国した。四十年六月には東京美術学校に図画師範科が設置され、白浜はその主任教授となり、以後、昭和三年に死去するまで長く図画教育界に君臨する。

白浜が欧米から齎した参考資料は図画師範科に置かれていたが、明治四十四年の東京美術学校火災で焼失した。『錦巷』第一号（明治四十四年四月）所載、「錦巷会近況」によれば、それらは図画教科用のノート類、留学中購めた参考画や書籍、欧米各国児童の成績品等で、これとともに図画師範科創立以来の生徒の成績品、教授用具、国内各地方より蒐集した絵図の成績品等が悉く灰燼に帰したという。

なお、白浜の留学によりそれまで彼が担当していた教職科目の「教育学」は担当者がなくなり（『東京美術学校一覧』所載「東京美術学校規則」に科目名のみ記載されており、担当者名の記載が無い）、明治三十九年十月に至り岡田秋嶺が「教育学・教授法」担当を命ぜられ、白浜帰国復職とともに彼と交代した。岡田は本校絵画科を明治三十年に卒業し、開成中学助教授として図画を教えていたところを同三十四年に正木に抜擢されて本校助教授（日本画担当）となった人で、図画教育に造詣が深かった。彼は「教育学・教授法」講義に関連して『美育に関する学説附諸学校教授細目』（明治四十年八月。福岡元治郎・目黒甚七発行）を著し、生徒に配布した。同書（茨城大学金子一夫氏提供）の緒言には次のように記されている。

緒言

去歳諸君の爲に教育學の概要を講ずるに當り、予の淺學能く其責を盡すこと能はずして、徒に諸君の紙筆を勞せしに過ぎざりしのみならず、加ふるに公務煩劇又美育を講ずるに暇あらざりしは、深く以て遺憾とせし所なり。然も美育の如き、予が匆卒の研究によりこれを諸君に傳ふる時は、恐くは諸君を誤ること多からん。玆に本邦諸學者の歐洲諸家の所見を解説翻譯せらるゝ教育論中美育に關する學説を集め、附するに先輩諸氏の多年の經驗により編せられたる教授細目等を以て此小册子となし、諸君に頒ち聊か職責の足らざる所を補はんとす。濡毫の餘、少間を得るの日、願くば一讀を吝まざらんことを。

秋嶺識

明治四十年度東京美術學校

日本畫科

西洋畫科　卒業期生四年生諸君

圖　案　科

内容は John Gill, Alexander Bain, Alfred Fouillee, Friedrich Froebel, Francis W Parker, Paūl Bergemann, Natorp の美育に関する学説の梗概および静岡県師範学校図画科教授法（同校作成）、千葉県師範学校図画教授細目（井上良慶作成）、埼玉県高等女学校図

画教授細目（工藤晨作成）、同図画教授表目（同）、埼玉県女子師範学校図画教授細目（同）、群馬県前橋中学校図画教授細目（川村孝作成）、新潟県小千谷中学校図画教授法（渡辺忠三郎作成）、夏季講習会予定案（同）等、既に上梓されたものの抜粋である。なお、右の教授法、教授細目は明治三十九年八月一日から五日まで本校で開かれた図画教育会主催第一回図画教育者大会における報告と考えられる。

④ 在外研究者、赴任者の増加

明治三十七年五月二日より同年十月二十九日まで米国セントルイスで万国博覧会が開かれた。日露戦争のさなかであったが渡航者が相次ぎ、本校からも少なからず渡航した。この博覧会の前後の時期には本校関係者のなかで博覧会見物、留学、赴任など種々の目的を持って海外に赴く者が著しく増加しているが、左記はその概況（三十六～三十八年）である。

桜岡三四郎（助教授）鋳金術研究のため三年間仏、米両国留学を命ぜられ、明治三十六年二月二十四日出発。三月二十四日ニューヨーク着。バーミンガム、シンシナチ等にも滞在し、三十八年十月七日、ニューヨークを出発。ベルギーを経てパリに至る。三十九年四月パリを発ちイタリアを巡歴。ロンドンを経て同年八月四日帰国。

下村観山（教授）明治三十六年二月二十日、ロンドンへ向けて出発。欧州各国を経て三十八年十二月十一日帰国。詳細は187頁。

海野美盛（教授）明治三十六年四月十八日、パリ出張を命ぜられて出発。セントルイス万国博も視察して三十七年八月八日帰国。出張の目的は正木直彦の指示により、フランスで縮彫機によるメダル製造法を研究し、縮彫機を購入することであった（吉田千鶴子著「東京美術学校依嘱製作資料」『東京芸術大学美術学部紀要』第十三号。昭和五十三年）。

沼田一雅（明治三十六年二月、助教授を辞職）農商務省海外実業練習生として陶磁器象形術を研究するため海野美盛と同船出航。同年六月から十月までパリのアカデミー・ジュリアンに通学し、十月よりセーブル陶磁器製造所に入所。三十九年六月三十日に帰国し、雇として復職。詳細は225頁。

筧定次（彫金科卒業生）海野美盛らと同船出航。三十八年六月現在パリ在住。同年十月農商務省海外実業練習生となり、合金金属製造色付法、金属装飾及び印刻術研究のため四十一年三月現在同地に滞在。

前島交吉（彫刻科卒業生）海野美盛らと同船出航。四十年三月農商務省海外実業練習生となり、鋳金術研究のため四十一年四月現在フランス滞在。

武石弘三郎（同）明治三十四年四月出発。ブリュッセル美術学校で彫刻を学び、同四十二年八月帰国。武石については佐々木嘉明